天使に捧げる鎮魂歌（レクイエム）〈改稿版〉

若山　かおり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天使に捧げる鎮魂歌（レクイエム）〈改稿版〉

【Ｎコード】
Ｎ５７９７Ｑ

【作者名】
若山　かおり

【あらすじ】
交通事故に遭い、意識不明のまま目覚めない妻。うなだれる僕の前に自称『天使』が現れた。
天使は言う。
「もし、あなたが死んでもいいというのなら、彼女を助けてあげることができるよ」
頷きかけた僕は、ふと昔の出来事を思い出す。
僕が出した答えは……。そして、天使の正体は？

短編『天使に捧げるレクイエム（レクイエム）』に頂いた感想をもとに書き直した改稿版です。
前半はあまり変わっていませんが、後半がだいぶ変わりました。
短編のままでも良い文字数だったのですが、見にくくなったので連載という形で起承転結の四部構成にしました。

〈 起 〉（前書き）

短編『天使に捧げるレクイエム（レクイエム）』に頂いた感想をもとに書き直した改稿版です。

前半はあまり変わっていませんが、後半がだいぶ変わりました。

短編のままでも良い文字数だったのですが、見にくくなったので連載という形で起承転結の四部構成にしました。

改稿したので短編版の方は削除しようかと思ったのですが、これはこれで一度書き上げたものなので、記念に残しておくことにしました。

〈 起 〉

穏やかに晴れた、とある休日の午前中。溜まりまくった洗濯物を片付けた僕と彼女は、いつものように、いつものスーパーへ買い物へ出かけた。

レジ袋二つを一杯にして、僕たちは買い物を終えた。重たい方は僕が持ち、花かつおとポテトチップスがメインの軽い方は彼女が持つ。建物の外へ出ると、あまりの太陽の眩しさに思わず目をつぶった。そんな僕の隣で嬉しそうに彼女が笑う。

「ねぇ、ナツ、お天気がいいから、遊歩道をお散歩して行こっ」

僕のレジ袋の内訳は、玉ねぎ、じゃがいも、ピーマン、レタス……。肉や魚は先週、買いだめしたので、既に家の冷凍庫に詰まっている。よって今日の買い物に生ものは、なし。料理酒とサラダ油とシーチキンの缶詰が重たいけれど、このお日様を楽しまないのは、もったいない。

「うん、じゃあ、寄り道して行こうか」

僕たちは一緒に歩き出す。

スーパーの前の横断歩道を渡ると、そこはもう件（くだん）の遊歩道だ。赤茶色の煉瓦を模した敷石で綺麗に舗装されていて、その石の隙間を五羽ほどの鳩がつついている。小さな植物の種でも落ちているのだろう。人が近づけば、ほんの数十センチほど飛びのくが、すぐまた地面に向かいはじめる。

この遊歩道の脇には川が流れていて――というよりも、古くからある川に沿ってあとから遊歩道が作られたらしく、川には鯉やカモが泳いでいたり、たまには大物の白鷺も来たりしてなかなか賑やかだ。運がよければ美しい青緑色の宝石のようなカワセミを見ることができ、そんな日は何となく良いことが起こりそうな気がする。

家は反対方向なので、まっすぐに帰るなら遊歩道は通らない。けれど僕も彼女も生き物が迎えてくれるこの遊歩道が好きだった。平

日はデスクワークの毎日で、どうしても屋内にこもってＰＣとにらめっこばかりになる。だから休日くらい心の洗濯というか、のんびりと外の風に当たりたい気分になるのだ。

僕たちの前にいた、足元のおぼつかない小さな男の子が、母親の手から放れて鳩たちを追いかけ始めた。男の子は鳩たちの真ん中に突っ込んでいく。さすがの鳩たちも無法者の侵入には恐れをなして、ぱっと空へ舞い上がった。それを更に追おうとして、男の子は転んでしまう。

僕の隣で彼女がはっと息を呑んだ。男の子は小さな子供特有の大きな声で、わんわんと泣き出した。しかし男の子の母親が抱き起こし優しくなぐさめ、「今度は鯉さんを見よう」と提案すると、涙はぴたりと止まる。連れ立っていく親子の後ろ姿に、彼女がほっと胸をなでおろしたのを感じた。

それから、僕たちは川沿いの遊歩道をのんびりと歩いた。川の中では鯉がのんびりと泳いでいる。

人通りはそれほど多くはないが、たまに先ほどのような親子連れや僕たちのような買い物帰りの奥さん、赤ちゃんの日光浴らしきベビーカーのご婦人、杖をついたご老人などとすれ違う。

「ねぇ」

彼女が僕を見上げた。彼女の身長は僕の顎の辺りまでしかないので、並んで歩いていると自然に見上げる格好になる。

「重くない？」

僕のレジ袋に目をやる。実は少し手が痛くなってきていた。さすがに料理酒とサラダ油とシーチキンの缶詰は強烈だ。よく考えたら玉ねぎとじゃがいもも結構、強敵かもしれない。けれど、ここはやせ我慢。重いと言えば、彼女が持つと言うのだから。

「重くないよ」

「でも、袋の方は悲鳴を上げているよ？」

見ればビニール製の袋は重みで伸びて、イワシ印のスーパーのシンボルマークがヒラメのようになっていた。取っ手のところも薄く

なっていて、今にも切れそうだ。
「大丈夫だよ」
少しだけ、嘘。
僕は袋を抱えるように持ち替えて、逃げるようにすたすたと歩き出した。
「待ってよ」と彼女が小走りに追ってくる。そして、僕に追いついた彼女は少々むくれながらも「ありがとう」と言ってくれた。
僕たちはまた、一緒にのんびり歩き出す。
向こうからやってきた、やはり散歩中らしきおじいさんが、手に提げていた袋からパンを取り出した。それを千切って川に投げる。鯉たちは今までのんびりしていたのが嘘のように、目の色を変えてパンくずに群がった。どこからともなく鳩たちもやってきて、風に飛ばされて水の中に入らなかったパンくずを夢中になってつつく。
「うわぁ、すごいねぇ」
大きな声で、彼女が何とも評価しかねる感想を漏らした。僕は「そうだね」と相槌を打つ。
二人とも、そのまま並んで何となく鯉を見ていた。
この川は一時はドブ川と呼ばれ、悪臭がひどかったらしい。それが地域の人々の努力のおかげでこんなに綺麗になった。今は鯉だけでなくオイカワやフナもいるという。更には清流にしか棲めないという鮎すら来るようになった――と、この辺りの大地主でもある大家さんが言っていた。
僕はそんな小魚たちを見つけようと目を凝らした。けれど、僕はあまり目が良い方ではないので、よく分からない。だから彼女に訊いた。
「鯉以外に何かいる？」
彼女はしばらく僕と同じように、じっと川底を見ていた。そして急に、にこっと笑って言った。
「アイ！」
「え？　何？」

僕は彼女の言ったことが理解できなくて聞き返す。
「だから、あなたが『恋以外に何か要る？』って聞くから、私は『愛が要るよ』って答えたのっ！」
彼女お得意の言葉遊びだ。彼女は、同音異義語やちょっとした駄洒落が好きなのだ。
ただ、今回は少し恥ずかしかったらしい。照れたようにそっぽを向く。その仕草は少女のようだが、彼女は少女というほど若くない。何しろ結婚して五年になる僕の妻なのだから。
僕の名前は、神原夏樹（かんばら なつき）。
彼女の名前は、神原名月（かんばら なつき）。
同じ名前である。
単なる偶然。もっとも、言葉遊び好きの彼女が同じ名前に気づいて、それが縁で親しくなったことは重要だ。
名前が同じでも結婚する前は良かった。彼女は僕のことを『神原さん』と呼んでいたし、僕は彼女を旧姓の『星野』と呼んでいた。それが同姓同名になってしまった。さすがに夫婦になってまで苗字で呼ぶのは変だ。かといって、彼女を自分と同じ名前で呼ぶ気にはなれない。それで、彼女は僕のことを夏（ナツ）と呼び、僕は彼女を月（ツキ）と呼ぶことにした。
ツキは少々、子供っぽいところがある。僕より二歳年下だから、ではなく、それが彼女の性格なのだろう。時々、困ってしまうこともあるが、いつまでも変わらなくあって欲しいとも思う。
休日の心の洗濯を満喫し、家路に向かう途中でのことだった。
「あっ、にんじん、買い忘れたっ！」
唐突にツキが叫ぶ。共働き夫婦なので休日の買い物は大切だ。買い忘れは痛い。
「ちょっとここで待ってて。すぐ買ってくるからっ！」
彼女は自分が持っていたレジ袋を僕に押し付け、スーパーに向かって逆戻りした。「そんなに慌てなくても」と、僕はゆっくりと後を追う。

その、僕の目の前で、事故は起きた。
スーパーに続く道への横断歩道。
右折してくる車に。
彼女は。
はねられた――。

「絶対、僕よりも先に死なないでくれよ」
結婚する前に、僕が彼女に言った言葉。
「そんなの、分からないわよ。先のことなんて知らないもんっ」
むすっとした顔で答える彼女。
「君がいなくなったら、僕はどうしたらいいか分からないよ」
僕がそう言った瞬間、彼女は顔を真っ赤にして僕の胸をぽかぽかと叩いた。曰く「あなたって人は、なんて恥ずかしい台詞を平気で言うのよっ！？」だそうで。「嬉しいじゃないのっ」と呟きながら、「こんな顔をあなたに見られたくないっ」と顔を隠す――僕の胸に自分の顔を押し付けるという行為によって。
彼女はしばらく僕の胸の中で喚いたあと、自分の顔をぱちん、と叩いた。何事もなかったかのように僕から離れて、それでも明らかに作ったと分かる真面目な顔で言う。
「じゃあ、あなたが先に死んだ場合、残された私はどうしたらいいの？」
「僕が死んだ後のことは分からないよ。君の自由でいいよ」
心の底から思っていることだったのだけど、これは失言だったらしい。彼女の眉がきゅっと吊りあがった。頬を膨らませて、先ほどとは別の理由で顔が真っ赤になる。
「冷たい人ね。だったら私が先に死ぬもんっ」
「それは駄目だ。僕が先だ」
「いいえ！　私っ」

しばらく不毛な言い争いを続けた末、諦めたように彼女が言った。
「仕方ないわね。私の方が二歳年下だから、あなたが死んだきっかり二年後に死ぬわ。これでいい？」
珍しく彼女が折れた。意地っ張りで子供っぽい彼女が折れた。
「だから、充分に長生きしてね」そう言って、彼女は抱きついてきた。

〈承〉

ツキの体は一瞬ふわりと浮かんで、ゆっくりと地面に落ち、数回バウンドする。まるで人形のように。

僕は持っていたレジ袋を放り出し、彼女に駆け寄る。

こんなの嘘だ。嘘だ、嘘だ、嘘だ……。

ツキ――！

僕は叫ぶ。

ぐったりとしたツキの体を抱きしめる。

目の前がくらくらする。ぐわんぐわんと耳鳴りがする。

僕は、言葉になっていない声を上げる。

人々が集まってくる。ざわめきの中から「救急車だ！」と、叫ぶ声がする。

よろよろと車から降りてきた運転手が、青ざめた顔で何か言っている。

けれど、それらはどこか遠くの世界の出来事のようで、僕にはまるで届かない。僕はただ、ツキをぎゅっと抱きしめるだけ。

お馴染みの、そして今まで関係者になったことはなかったサイレンの音が近づいてきて、救急車が到着した。ツキが担架に乗せられ、運ばれる。彼女が連れ去られるのを奪い返そうとでもするかのように、僕は担架にかじりつくようにして続いて飛び乗った。

その後の記憶は曖昧だ。

気づいたら、ツキは病院のベッドの上に寝かされていて、僕は彼女のベッドに突っ伏していた。

彼女は目覚めない。

外傷はたいしたことがなかったが、頭を強く打ったらしい。

あれから二日経った。

けれど、彼女は目覚めない……。

ツキの白いベッド。その隣に僕は座っている。足の長さがあっていないのか、座り心地の悪い赤い丸椅子は、僕が彼女に触れるたび、がたがた揺れて音を立てる。

ちょっと歳のいった眠り姫。

どうして君は目覚めないのだろう。

僕は彼女の髪に触れる。瞼に、鼻に、唇に。

どうして、どうして。なぜ、なぜ、なぜ？

どうして、あのとき彼女を一人で行かせたんだろう。にんじんくらい、仲良く二人で買いに行けば良かったじゃないか。なぜ、君は一人で行ってしまったんだ。

ぐるぐると後悔が渦巻く。

……そうやって、僕がうなだれて自分の無力を感じているときだった。

「やった！　出てこられたっ！」

突然、背後から声がした。子供のような高い声だ。

なんだよ、うるさいな。

そう思ったとき、僕は気づいた。

ここは病院の個室で、この部屋には僕とツキしかいなくて、ドアはずっと閉めたままで、ドアが開いた音は聞いていなくて――だから、僕の後ろに人がいるはずはないのだ。

僕はどきりとした。恐る恐る、振り向く。

そこに、人がいた。いるはずのないところに、人がいた。

いったい……？

薄暗くなり始めた陽（ひ）の光を頼りに、そいつの姿を精察する。目の悪い僕は電灯の助けを借りたいところだけれど、スイッチは入り口の傍で、ちょうどそいつの後ろにある。

そいつは白いリノリウムの床にすっくと立っていた。全身に白い布のようなものを巻きつけた白ずくめ。ただ、光度が足りないから

青白く見える。背は低く、幼い感じのする顔立ちは少年とも少女とも判別できなかった。
僕に注目されていることに気づいてか、そいつはにこっと笑った。
「君は……？」
「俺は神様の下働きだよ。ええと、だから俺は『天使』だっ！」
僕は一瞬耳を疑った。そしてすぐに気づいた。僕はからかわれているのだ。全身に巻いた白い布。まるでシーツのような。そう、シーツだ。間違いない。なんといっても、ここは病院だ。こいつは他の病室の入院患者か見舞い客で、きっとドアの隙間から僕の姿を見て、からかってやろうとやってきたのだ。僕の注意はずっとツキに向いていたから、ドアの開閉音は聞き逃しただけだろう。
「馬鹿にするな。出て行け！」
僕は普段、めったに声を荒立てる方ではないと思う。けれど、今は怒鳴らずにいられなかった。
僕が言葉をぶつけた瞬間、そいつはびくっと肩を上げ、今にも泣き出しそうな顔になった。言った僕の方が悪かったのかと錯覚するくらいに。
相手は子供なのだ。多少のいたずらは大目に見るのが大人というものだろう。僕は少しだけ反省し、努めて感情を抑えて謝った。
「すまなかった。でも、今はそういう冗談は聞きたくない。出て行ってくれ」
すると、そいつはたちまち笑顔を取り戻し、とんでもないことを言った。
「もし、あなたが死んでもいいというのなら、彼女を助けてあげることができるよ」
「な……！？」
僕はそいつの言ったことが理解できなかった。
「だから、もし、あなたが死んでもいいなら、彼女を助けてあげられる、って」
にこにこと、そいつは言う。

その笑顔に、僕はかっとなる。
「何をふざけたことを……！」
勝手にツキの病室に入ってきて、天使だなんて戯言(たわごと)をほざき、挙句の果てに何だって！？
「出て行け！！」
子供のいたずらにしたって、不謹慎にもほどがある。ツキは、まだ目覚めていないだけだ。もう少しすればきっと目覚めるのだ。それなのに……それなのに、この言い方はまるでツキがこのまま死んでしまうかのようじゃないか。
「信じられない？」と、そいつは首を傾ける。
「誰が信じるか！！」と、僕は叫ぶ。
怒りに右手を握り締める。爪が食い込みこぶしが白くなる。このまま殴ってやりたい衝動をやっとのことで抑えた。
「ええと、じゃあ、これなら？」
言うと同時に、そいつの姿がすぅっと消えた。今までそいつに遮られて見えなかったドアが見え、電灯のスイッチも見える。僕は我が目を疑った。いくら目の悪い僕だって、そこに物があるかないかくらいは分かるはずだ。
いったい、何が起きたんだ？
僕はきょろきょろとあたりを見渡す。どこにも人影は見当たらない。
――本当に、天使なのか？
そんなもの、いるわけない。僕は幻を見たのだ。
少し、休もう。僕はおかしい。狂っている。このままではいけない。売店に行って何か飲み物を買ってこよう。いや、よく考えたら昨日、お義母(かあ)さんが差し入れてくれたサンドイッチをつまんで以来、ずっと何も口にしていない。まずは食べ物か。
僕は立ち上がろうとした。造りの悪い椅子が、がたっと大きな音を立てる。長いこと同じ姿勢でいたせいか、足に力が入らなかった。僕はうまく踏ん張ることができず、よろめくようにまた椅子に腰掛

けてしまう。
「はは、ははは……」
乾いた笑いが口から漏れる。いったい僕は何をやっているんだか。
ため息が出た。
僕は再び――今度は気をつけながら、ゆっくりと立ち上がった。
まるで食欲がわかない。食べ物を買う気にもなれず、売店まで行かずに同じ階にある自動販売機でコーヒーを買った。すぐに病室に戻り、また赤い丸椅子に座って無糖のコーヒーを口に含んだ。
苦い。
ツキは変わらず、青白い顔で眠っている。
「……天使なら、ツキを助けることができるのか？」
僕の口はこう呟いていた。
天使なんているわけない。そう思いながらも、僕の心は縋っていた。僕の傍でツキが笑っていないという事実に、僕は疲れていたのだ。
僕の呟きが聞こえたのだろう。そいつは再び音もなく姿を現した。
ああ、駄目だ。僕は信じてしまう。この胡散臭すぎる天使とやらを。
「信じてくれたんだねっ」
人懐っこく笑う。ただの子供のように見える。でも、『天使』だ。
天使はにこにこしながら寄ってきた。僕が座っているのと同じ丸椅子をツキが寝ているベッドの下から引きずり出して、僕の隣に並べて座る。背が低いので、足は床に付かずにぶらぶらさせていた。
天使というのに黒髪で、部屋が暗いからはっきりとは分からないが、たぶん目も黒っぽい色で、天使の翼らしきものも天使の輪らしきものも見当たらない。
「どういうことか、説明して欲しい」
かすれる声で僕は言った。天使は待ってましたとばかりに身を乗り出す。
「ええとねっ。神様のところには、死ぬ人間の名前が書かれた名簿があるんだよ。で、その名簿は名前がカタカナで書いてあるんだ」

天使はくりくりとした目でじっと僕を見る。もう分かるでしょう、と目が言っている。
「彼女の名前は『カンバラナツキ』。そして、あなたの名前は――」
「『カンバラナツキ』だ」
僕が答える。僕とツキは同じ名前だ。
「だから、彼女じゃなくて、あなたが死ぬんでもいい。名簿上は問題ないよ」
こいつは天使ではなくて、悪魔というのではないだろうか。
いや、それはどちらでもいい。それより、ツキが助かるなら、僕は……。

ふと、僕の耳に蘇るツキの言葉。数年前の、あの出来事のあとの。
「あなたが死んだ二年後に私が死ぬ、っていう約束。あれ、撤回する」
僕の目をまっすぐに射抜くかのようなツキの眼差し。凛とした声で彼女は宣言する。
「私、誰かに先に死なれて取り残されるの、もう嫌」
ツキが泣くのかと、僕は身構えた。けれど彼女は泣かなかった。涙はもう枯れ果てて、泣くことすらできなくなっていたのだ。ツキはただじっと、僕を見つめていた。

〈 転 〉

「心臓がぴくぴくしていてね。もう、可愛くって！」
そのときツキは妊娠していた。
超音波検査で初めて心拍が確認された日のことだ。彼女は夢中になって胎児の様子を熱弁した。そして「ぴくぴくぴくぴくっ……」と歌うように繰り返す。
「ねえねえ、ナツ」
突然、ツキはぐいっと僕の頭を自分のお腹に引き寄せた。僕は一瞬、戸惑うが、彼女の意図を察して自ら耳を近づける。
「聞こえる？」
「無理だよ」
「そうだよね。だって、まだこーんなに小さいんだもんっ」
ツキは、右手の親指と人差し指で一センチほどの隙間を作る。
「だからね、今度の検診は一緒に行ってほしいな。あなたにこの子を見せてあげたいし、この子のことを見てあげてほしい」
駄目かな？　と、彼女にしては気弱に僕の様子を伺う。僕は少しだけためらった。なにしろ、行き先は産婦人科だ。僕の想像できない世界だ。……それでも、こう答える。
「いいよ」
ツキは、ぱっと顔を輝かせる。彼女は浮かれていた。僕も浮かれていたと思う。僕たちは買ったばかりの出産育児本を二人で繰り返し何度も読んだ。僕たちは幸せだった。
次の検診の日。僕は無理して年休を取り、彼女と一緒に産婦人科の門をくぐった。ものすごく気恥ずかしかったけれど、行ってみれば同じような顔をした旦那さんが結構いて、ほっとした。
そして、超音波検査を見た。
医者に説明されなければ、何が映っているのか分からない画面を見た。

その中央で、ぴくぴくしているはずの、心臓。
けれど、画面の中で動いているものは、何もなかった。
「残念ですが……稽留流産です」
医者が言う。
「この子は、どうなるんですか？」
乾いた声で僕が言う。心臓が動いていないのだ。どうなるも、何も、ない。だけど、理解できなかった。入院すればよくなるのかも、なんてことすら思った。
「誰も何も悪くなくても、妊娠初期では十五パーセントの人が流産します。稽留流産は、妊婦に自覚症状がなくても胎児が死亡している状態で……」
僕の頭は麻痺していて、医者の言っていることはまともに聞こえていなかった。「あんた、医者だろう、何とかしてくれよ」そんな、すごくありがちなことを言った気がする。
服を引っ張られる感覚がしてその方向を見ると、ツキが僕のシャツの裾を握っていた。彼女はただ涙を流していて、ただただ涙が流れ続けていて――僕は彼女を抱きしめた。

――ツキは自分を責め続けた。僕に謝り、あの子に謝り続けた。
「私が悪かったの。私が体に悪いものを食べていたから。規則正しい生活を送っていなかったから」
「違う。君は悪くない。だって、どうしようもなかったんだ」
僕たちは毎晩、抱き合って眠った。ツキは、寝ている間に僕がいなくなってしまうことを恐れるかのように、決して僕を離さなかった。
一月経って、ツキは職場に復帰した。僕たちは社会人で、僕はもともと年休以上には休めないし、彼女だっていつまでも戻らないわけにはいかない。

あるとき、ツキは僕に言った。
「あなたが死んだ二年後に私が死ぬ、っていう約束。あれ、撤回する」
僕の目をまっすぐに射抜くかのようなツキの眼差し。凛とした声で彼女は宣言する。
「私、誰かに先に死なれて取り残されるの、もう嫌」
僕は何も答えられなかった。

「どうしたの？」
天使の声に現実に引き戻された。いや、これは本当に現実なんだろうか？　僕の目の前には眠ったままのツキがいる。青白い顔で瞳を閉じている。そんなの嘘だ。彼女は歳不相応なくらいに元気なんだ。時にはこっちが恥ずかしくなったり、慌てたりするほど子供っぽかったりして僕を困らせる。僕にとって、いるのが当たり前で、いなくてはならない存在なんだ。
「ねぇ？」
無言のままの僕を、天使はきょとんとした顔で見上げている。僕よりだいぶ背が低いので、すぐ隣に座る僕を見るのはちょっと首が辛そうだ。相変わらず人懐っこい笑顔のままで、言っていることは御伽噺の悪魔あたりが言いそうなことなのに、不思議と悪意は感じられない。
僕は目覚めないツキを見る。
ツキを助けたい。でも、彼女を助けてくれと言ったら、僕は死ななければならないらしい。僕が死んだら、彼女は残される。残されるのは残酷だ。ツキに二度とあんな思いをさせたくない。かといって、僕だって残されるのは嫌だ。
頭がくらくらしてきた。
「僕が残されるか、ツキが残されるか……か」

呟く。
どちらも選びたくない……。
ふと、袖を引っ張られるのを感じて、僕は天使に目を向けた。天使はどこか傷ついたような、泣きそうな目をして僕を見ていた。
「そんな顔させたくて、来たんじゃないよっ」
突然、天使が叫んだ。表情にそぐわない、怒ったような口調。いったいどうしたというのだろう？
天使はじっと僕を見ている。僕もじっと天使を見ている。しばらく沈黙が続いたのち、天使は僕から顔を背けて俯いた。
「……ごめんなさい。俺、話のもっていき方を間違えた。考えなしだった。俺は知っていたのに。あなたたちの悲しみを……」
小さな声で天使は言った。
「君は、『あの子』のことを知っているのか！？」
天使はこくんと頷いた。ああ、そうか。こいつは『天使』なんだ。
「あなたたちはとても悲しんだ。とてもとても悲しんだ。……そうやって、親を悲しませて先に死んだ子供がどうなるか、知っている？」
透明な、感情の読めない声で天使が言う。僕は何を言えばいいのか思いつかず、結局何も言えない。天使は僕に答えを求めているわけではないらしく、静かに言を継いだ。
「親を悲しませた罪で、死ぬことも赦されず、神様の下働きになるんだよ」
「……『逆縁の罪』？」
「そう。そんな感じ」
仏教では子供が親より先に死ぬと『逆縁の罪』という罪になるのだと聞いたことがある。僕は無神論者だからよく分からないけれど、その罪に問われた子供は父母供養のために小石を積んで塔を作らなければならない。しかし、石を積むとすぐに鬼が来て壊してしまうという……。
僕はふと、疑問に思った。

「君は……？」
漠然とした予感がした。
「いい話があるんだよっ。本当はね、初めからこれを言おうと思って来たんだ。早く言えばよかった」
天使は僕の言葉を遮るように椅子からぴょんと飛び降りた。まるで踊るようにくるりと身を翻し、僕のほうを向いたときには、先ほどの泣きそうな表情が嘘のように消えていた。それどころか、いたずらでも企んでいるような不敵な笑みさえ浮かべている。
「どういうわけか運のいいことに、ここに『カンバラナツキ』がもう一人います。というわけで、この『カンバラナツキ』に死んでもらうことにして、彼女には生き返ってもらいましょう！　って、どう？」
「ここに？　もう一人？」
「うん、ここに」
天使は自分を指す。
「君は？」
「『カンバラナツキ』」
僕の予感は的中した。

「この子の名前、どうしようか？」
あの頃、あの子がまだツキのお腹にいた頃のこと。彼女が僕に訊いた。
「え？　まだ性別は分かってないんだよね？」
「でも、『この子』じゃ可哀相だから、とりあえずの名前。胎名っていうのよ」
しばし、僕は考える。
「……じゃあ、『ナツキ』」
「それじゃあ、私たちと一緒じゃない」

「いいだろ？　君がツキで、僕がナツ。そして、この子がナツキ」

「君は、『ナツキ』なんだね」
「だから、そう言っているじゃんっ」
照れ隠しなのか、ちょっと小生意気なふくれっ面。よく聞けば、喋り方がツキにそっくりだ。顔は、ひょっとして、なんとなく僕に似ている、かもしれない。
「それじゃ、俺は行くね。これで俺はちゃんと死ねるから」
にこにこと手を振るナツキに僕はぎょっとした。まさか、このまますぐに消えてしまう気なのか。
「ちょ、ちょっと待ってくれ」
話をしたい。まず何から話したらいいのか分からないけれど、ずっと逢いたかったナツキだ。言葉にならない、胸の奥にしまっていた想いがたくさんある。
「せっかく逢えたんだから、もっといてくれよ……！」
「そうもいかないんだよー」
にっこり笑う。
何故ここで笑うんだ。ナツキは僕と話したくないのか。そんなに急いで行く理由はなんなんだ？
今にも消えようとするナツキに、僕は会話が続くように努力をする。
「ええと、君は既に、その……死んでいる、はず……」
「だから言ったろ。神様の下で死ぬことも赦されず下働きをしている、って。でも、これで俺は大丈夫。彼女も目覚める。めでたし、めでたし」
ナツキは、ちょんちょん、と手で拍子木を打つ真似をする。
何か釈然としない。
もやもやした気持ちを抱える僕をよそに、ナツキは「それじゃ」

などと、まるでちょっと散歩にでも行くような気軽さで手を上げた。
先を急ぐナツキに、僕は違和感を感じた。
何かを見落としている。
僕がナツキを引き止める言葉を紡ぎだそうとしたとき、ナツキのほうから言葉を発っした。
「そうそう、そいつっ！」
ベッドに横たわったまま、ぴくりともしないツキをぴしっと指さす。
「俺の妹には『なつき』なんて名前、付けるなよ。俺は俺、妹は妹だからな。だいたい家中が『なつき』じゃ、ややこしいだろ」
「え……？」
突然のことに、僕は戸惑う。
ナツキは腕を組んで虚空を見つめ、いかにも考え中というポーズをした。それから閃いたとばかりにぽんっと手を打ち、にやぁっと笑う。
「俺が名前をつけてやる！　そいつは『愛（アイ）』だっ！」
ナツキは自分の名付けに満足したように、ご機嫌でツキを――ツキの胎内の妹を――見る。
「妊娠五週目。まだちっちゃいけど、そこに『愛（アイ）が居（い）るよ』」
――『アイガイルヨ』
どこかで聞いた言葉。僕は記憶を手繰り寄せる。
そうだ。あのとき。事故の直前。鯉を見ながらツキが言った言葉と奇しくも同じ――。
奇しくも？
いや、違う。ナツキは知っていて言っているのだ。だって、いたずらっぽく笑っている。ナツキは言葉遊びが好きなツキの子供なのだから。
……あれ？
何か引っかかった。
そんな僕の心のざわめきとは裏腹に、ナツキは元気に手を振った。

「もうちょっとしたら、ゲロゲロ吐くから、気をつけてやってなっ」
ナツキの姿がすぅっと薄れていく。
「ちょっ、ちょっと待てよ、消えるなよ！」
僕の心臓が警鐘を鳴らす。駄目だ。このままナツキを行かせてはいけない。
僕は慌てて半透明のナツキの腕に手を伸ばす。温かさは感じるものの、半分薄れた腕は掴むことはできない。
僕は必死になる。
考えろ！
何か、違うんだ！！
何が、おかしい？
何を、見落としている……？
僕は必死になって、この違和感を無理やり言葉に置き換えた。
そして、ナツキに、ぶつける。
「『カタカナで名前が書かれた名簿』なんて、『嘘』だろ！」
思い切り叫んだ。
空気が凍りついたように静まり返った。
僕は全速力で走ってきたかのように、肩で息をしていた。
たぶん、それは一瞬のことだったのだろう。しかし、僕にはとても長い時間に感じられた。
「……なんで分かっちゃったのかなぁ？」
心底驚いた声と共に、薄れていたナツキの体が再び鮮明になった。
ナツキの双眸からは涙が溢れていた。
「それは君が、僕とツキの子供だからだよ」
僕は掴めるようになったナツキの腕を引き寄せ、力いっぱい抱きしめた。

〈 結 〉

僕の腕の中でナツキが泣いていた。初めは声を殺して。そのうち、だんだん大きな声で。子供特有の大きな声で、わんわんと……。

「なんで、なんで分かるんだよっ！」

ナツキは泣きながら怒っていた。ナツキの親になり損ねた僕は、泣きじゃくる子供の上手ななぐさめ方を知らない。いつだったか鳩に逃げられて転んだ男の子の母親のように、うまく何かを言ってあげることができない。だから、ただ力いっぱい抱きしめた。現実には存在しないはずのナツキの体からは、何故か温かさと重さとが感じられて、たまらなく愛おしかった。

「せっかく皆が幸せになる話を作ったのにっ！」

歯を食いしばるようにしてナツキが叫ぶ。喚き続けるナツキを抱きながら、ナツキには申し訳ないけれど僕は心底、ほっとしていた。ナツキの作り話に気づけて良かった、と。

分かったのは奇跡だと思う。

ナツキが急いで消えようとしていたのがひっかかった。

僕は嘘が嫌いなので、あまり嘘をつくことはない。しかし、いざ嘘をつくとそわそわして、嘘がばれる前に早くその場を去ろうとしてしまう。そんな僕と、さっきのナツキは似ていた。

僕の安堵し、嬉しさに緩んだ顔は、ナツキの癪に障ったらしい。ナツキはいっそう激しく怒り出した。

「どうして『カタカナで名前が書かれた名簿』が『嘘』だって分かったんだよっ！」

「……確信があったわけじゃないよ。ただ、都合がよすぎたから」

そう。できすぎていた。

神様の名簿がカタカナだなんて。よく考えればいかにも嘘っぽい。

夏樹と名月とナツキ。

『カンバラナツキ』が三人いて、その中の誰が死んでも良くて、そ

れなら死ぬことが赦されずに神様の下働きをしているナツキが死ねば皆、幸せ――そんなの都合が良すぎる。
思わず信じてしまいそうになる言葉の魔法。
言葉遊びの好きなツキ。その子供のナツキが作り出した都合のいい御伽噺。
「本当は、どういうことなんだ？　ナツキは、ツキは、どうなるんだ？」
言いながら、僕は自分の言葉に動揺した。ナツキを引き止められた安心感で後回しにしてしまっていたが、ツキはまだ目覚めていないのだ。
真実を知りたい。僕の心臓は早鐘のように鳴った。
僕の不安を感じたのか、ナツキは顔を上げてにっこり笑った。洟をすすり上げながらだが、元気にはっきりと答える。
「大丈夫っ。彼女は死なないよ。もともと死ぬ予定もなかった。ただ、かつての彼女の願いが残っていただけ」
「願い？」
「『あなたにこの子を見せてあげたいし、この子のことを見てあげてほしい』」
ゆっくりとナツキが言う。
聞き覚えがある台詞。昔、確かにツキはそう言った。初めてナツキの心拍が確認された日に。
「――彼女はずっと俺のことを忘れられなかった。小さい子供を見かければ、つい目で追っちゃって、俺が生まれていればこのくらいの歳のはず、なんてずっと考えていて……。あなたも、そうだろ？」
言葉に詰まった。ツキが小さい子供を気にしているのは知っていたが、僕自身もそうだったんだろうか。
「俺、あなたたちを悲しませるばっかりで、何もできなくて。あなたたちは、ずっとずっと俺のこと忘れなくてっ。……それじゃ、これから生まれてくる妹が可哀相じゃん。俺の生まれ変わりとか言われちゃったら、妹の立場ないじゃん」

僕の目をまっすぐに射抜くかのようなナツキの眼差し。凛とした声。本当にツキにそっくりだ。
「……だから、神様が俺に親孝行のチャンスをくれた。――俺が神様の下で下働きをしている、っていうのは本当だよ。俺はこの世でもあの世でもない中途半端なところに留まったまま動けない。この狭間の世界に、意識不明の彼女が来た。神様は、本来この世の存在の彼女がしばらく狭間の世界にいる代わりに、彼女の願いどおりに俺をこの世に出してくれた」
僕は神様を信じない方だ。けれど目の前に存在しないはずのナツキがいて、僕と会話している。だから今だけは、ナツキの神様をまるごと信じよう。
僕を見上げるナツキ。本当なら、まだよちよち歩きの小さな子供だ。満足に考えたり、言葉を交わしたりできるような歳ではない。だからこれは仮の姿で、ナツキの心を伝えやすくするための神様の配慮なのだろう。
「……どうして作り話なんかしたんだい？　普通に逢いに来てくれればよかったじゃないか？」
僕の疑問に、ナツキはむすっとして唇を突き出した。
「そんなことしたら、あなたはずっと『可哀相な俺』を覚えているだろ？　忘れて欲しいんだ。俺のことを思い出して悲しむあなたたちの姿を、もう見たくないんだ。――『名簿』の話は、俺が一生懸命考えて作った皆が幸せになる話なんだよ」
僕は――僕たちは、どうやらこの小さなナツキをとても苦しめていたらしい。
『名簿』の話は皆が幸せになる話――ナツキが心からそう思っているのは、ちゃんと伝わっている。だけど僕はあえてこう言う。
「嘘だよ」
「もう、嘘なんかついていないよっ！」
むきになるナツキに、僕は左右に首を振る。
「『名簿』の話で皆が幸せになるんて、『嘘』。ナツキが幸せじゃ

ないだろ？　忘れて欲しい？　そんなの嘘だろ？　それでいいわけないだろ？　そんなの、悲しすぎるよ！」
「でもっ……！」
「君だって、一緒に生きたかったはずだ！！」
思わず叫んでいた。
忘れて欲しい？　ふざけるな。
妹が可哀相？　ナツキの方がよっぽど可哀相だ。
「……僕たちは君を喪って、悲しくて悲しくて。辛い思いから立ち直ろうと、あがいてあがいてあがいて。それでもどうしようもなくて！」
「知っているよっ！」
再び、ナツキの目に涙が盛り上がってきた。
ナツキは俯いて、涙が零れ落ちるのもそのままに、嗚咽まみれに言葉を紡ぐ。
「……だから、だから俺は、悔しくて辛くて悲しくて申し訳なくて！
それで、この世でもあの世でもない、中途半端なところから動けなくて！
俺が、一緒に生きたかったなんて言っちゃったら、あなたたちは困るだろ？
だから、あなたたちが辛くて悲しいのを見ていなければならないことが、『逆縁の罪』なんだと。
動けないでいることが『逆縁の罪』なんだと。
そう自分に言い聞かせて我慢してしていたんだ……！
……本当は、本当はこれから生まれることができる妹が羨ましいよ！　でも、そんなこと言っちゃいけないんだっ！！」
号泣するナツキを、僕は抱きしめた。
「言っていいんだよ。当然の気持ちだろ？　僕だって君を忘れたくない。辛い思いだって僕たちのもの。僕たちが君を愛している気持ちから生まれるもの。それを忘れるなんて絶対に嫌だよ」
僕は鼻がつんと痛くなって、喉がかっと熱くなるのを感じた。

ナツキの髪に、僕の涙のしずくが落ちる。
「……なんだよ。俺、何のために出てきたんだよ？」
しゃくりあげながらナツキが呟く。
「僕に、逢いに来てくれたんだろ？　神様は作り話をしろ、なんて言った？」
「言っていない」
「そうだろうね。君は僕に逢いに来てくれるだけで、充分、親孝行をしたんだよ」
背中を優しく撫でる。しばらくそのまま、撫で続ける。そうしているうちに徐々にナツキの動悸が鎮まってきた。
涙をぬぐいながら、ナツキはツキに目をやった。
「起きている彼女にも逢いたかったな……」
「『彼女』じゃなくて、言ってあげてよ。『お母さん』って」
僕の言葉に、ナツキはびっくりしたように目を見開いた。
「いいの？　その言葉、俺が言ってもいいの？　子供らしくできなかった俺が言っても、いいの？」
ナツキには、ナツキなりのこだわりとけじめがあるらしい。だけど、何故ためらう必要があるのだろう？
「当たり前だろ」
僕の言葉に、ナツキは顔をくしゃくしゃにして笑う。
ナツキは僕の腕の中から抜け出して、ツキのベッドに寄っていった。大げさなくらいに首を傾けて、眠ったままのツキの顔を覗き込む。
それからナツキは、少し困ったように、あるいは悩んでいるように眉根を寄せた。まだためらっているのだろうか、そう僕が思ったとき、ナツキは「ええいっ！」と声を上げた。もぞもぞと布団に手を突っ込み、ツキの手を布団から引きずり出す。
何をしているんだろう、と僕は思った。
ナツキは、ツキの人差し指を握っていた。
ナツキは幸せそうに笑っている。――僕は思い出した。昔、本で

見た母親の指を握る赤ちゃんの写真を。ナツキはずっと、そうしたかったのに違いない。
そしてナツキは、眠ったままのツキに向かって、そっと呟いた。
「お母さん」――と。
その途端、ナツキの体が一瞬ぶれた。消えたり現れたりしたときのように、すぅっと体が薄くなるのではなく、揺れるように存在が危うくなった。
「あれ？　俺、本当に消えるみたいだ」
何となく感じた――『逆縁の罪』が赦されたのだと。
「ナツキ！」
僕は叫ぶ。
本当は叫ぶ必要などないのだ。ナツキは赦されて解放されるのだから。
だけど、叫ばずにいられなかった。
どんな形にしろ、これはナツキとの――別れだから。
「ありがとう……、お父さん」
ナツキの体はどんどん不明瞭になっていく。まるで揺れる水面に映った影のように。
「ありがとう、ナツキ。君がいてくれて、君に逢えて、本当に嬉しかった」
忘れないよ……。
ナツキは笑っていた。
今までで一番、元気よく、心からの笑顔で。
ナツキの体は溶けて、解けて、光になった……。
「あなた、ねぇ、あなた……。もう、ナツ！」
揺すぶられて目を開けた。

目の前はとても眩しく、真っ白だった。
目をこすりながら体を起こすと、初めに視界に入ってきたものは白い掛け布団カバーだったということが分かる。それにしても眩しいのは、明るい太陽の光のせいだ。すっかり朝になっている。
朝……？
ナツキは？
あれは夢だったのか？
僕は、ぼーっとする頭を抑えながら目の前を見た。
そして、彼女の姿を捉えたとき、眠気はいっぺんに吹き飛んだ。
「ツキ！」
ツキが目覚めている。僕のことを見つめている。
彼女は、彼女の足に頭を乗せて寝ていた僕にちょっと不満顔だ。
「すっかり痺れちゃって足の感覚がない」と文句を言う。けど、それが何だ！
僕は彼女を抱きしめて、頬を擦り寄せる。
「ちょっ……。ちょっと、ナツ！　髭が痛いわよ！」
髭なんか、この二日、伸ばしっぱなしだ。それがどうした！？
きつくきつく、彼女を抱きしめる。痛いだの、苦しいだの、そんな言葉は耳からすり抜けていく。そう言っている彼女だって、僕のことを強く抱きしめているのだ。
「ナツ……ごめんなさい。心配かけちゃった……」
僕は黙って首を振った。ツキが目覚めてくれたら、もういいのだ。それより早く、ツキにナツキのことを話したい。なのに僕の喉は熱くなっていて、なかなか声を出すことができない。
だから、僕より先にツキが言った。
「私ね、目が覚める前にナツキに逢ったの。ナツキは、あなたに逢ってきたと言っていたよ……？」
僕は目を丸くした。そんな僕を見て、ツキは嬉しそうに「やっぱり夢じゃなかったんだ」と呟いた。
ナツキは僕の前から消えた後、ツキのいた狭間の世界を抜けてあ

の世にいった、ということだろうか。ツキがこの世に戻るのと反対に。

「私、胸が詰まって何も言えなかった。たくさんたくさん言いたいことがあったのに、なんにも……」

ツキはそこで言葉を切って、幸せそうに自分のお腹を撫でた。

「そしたらね、私の中から声がしたの。『愛（アイ）、知っているからねっ』って。『ナツキの存在（こと）も、ナツキの気持ちも』」

愛（アイ）――ナツキが名付けた、ナツキの妹の名前。

「びっくりしたわ。――ナツキはすぐにその声に気づいて、私にアイのことやあなたとの話を教えてくれたの」

そして彼女は、楽しそうに笑いながら続けた。

「それでね、アイがナツキに向かって言うのよ。『愛しているからねっ』」

ツキはころころと笑う。僕は初め、彼女が何故そんなふうに笑ったのか理解できなかった。が、しばらくして、気づいた。

「……駄洒落？」

――『アイ、シッテイルカラネ』

――『アイシテイルカラネ』

いまいち決まらない。

でも、アイの一生懸命の想い。

生まれてくる妹が羨ましい、けど、それは言っちゃいけないと泣きながら叫んだナツキ。それを知っていてなお、愛していると言ったアイ。

ああ、なんだか僕はナツキとアイに負けている気がする。情けない。

「ナツ、私、頑張らなきゃって思ったの。……ナツキが笑っていたから。アイの想いが伝わってきたから」

ツキはとても穏やかな顔をしていた。

伝わってくる。ツキも僕と同じような気持ちをナツキとアイに抱いたのだ。

僕たちは、まだまだだ。これから変わっていかなければならない。
「ツキ――、僕は未熟で頼りないけれど、これからも一緒に歩いていってくれるかな？」
「私こそ」
僕とツキは小指を絡める。
僕たちは前に向かって進み始めた――。

〈 結 〉（後書き）

正直なところ、改稿して自信作になった、ということはありません。

試行錯誤して、あがいて、やっとひねり出した、という感じです。

短編版でご指摘くださった方々に深く感謝申し上げます。

ここまでお付き合い、どうもありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5797q/

天使に捧げる鎮魂歌（レクイエム）〈改稿版〉

2011年7月23日03時27分発行